

## 生活経営教育における教育的価値論

吉 本 敏 子

**Educational Value on livelihood Management Education**

**Toshiko YOSHIMOTO**

### 要 旨

本研究は、生活経営教育の教育的ニーズについて明らかにするために、そのプロセスの一つとして、生活経営教育の教育的価値を検討することを目的とした。まず、教育に関するニーズを体系的に把握し、またその体系の中心に位置し各ニーズと相互作用を持つ教育的価値について、主に目的論の視点から検討した。さらに教育的価値と生活経営における主体形成論を照らし合わせて検討し、プラグマティズムの実践的価値論と位階的主体形成論の両者を統合させた教育的価値の設定の必要性を指摘した。

### 緒 言

生活経営教育 (Livelihood Management Education) に関する理論的・実証的研究を進めていくにあたり、筆者は既に生活経営教育の概念枠組を明らかにしている。<sup>1)</sup> ここではその概念枠組に従って、生活経営教育のニーズ (Needs) について明らかにするために、そのステップの一つとして生活経営教育の教育的価値を検討するものである。生活経営教育のニーズについては、生活経営教育がはたして本当に必要とされているのか、また教育の目的やその内容として何が求められているのかということ、すなわち生活経営教育の教育的ニーズを明らかにすることを最終目的とする。そのためには、まず①ニーズと教育的価値について整理し、また生活経営教育における教育的価値を明らかにする、次に②生活経営教育の教育的価値論を踏まえて、社会的ニーズを明らかにする、③学問的ニーズを明らかにする、さらに④教育的ニーズに関する用語の整理、学習指導要領にみる教育的ニーズの把握、実態・意識調査にみる教育的ニーズの把握を通して、生活経営教育の教育的ニーズと課題を明らかにする、という手順を考えている。本報告では、その中の①ニーズと教育的価値について整理し、また生活経営教育における教育的価値を検討することを目的とする。

### 第1節 教育に関するニーズの捉え方

まずここでは、教育のニーズ把握のための体系を明らかにする。教育の「ニーズ (Needs)」という言葉に類する語として、「学習要求」や「学習欲求」「学習必要」「学習関心」「教育必要性」「教育欲求」などという言葉がある。そして、これらの語の意味には若干のニュアンスの相違がある。<sup>2)</sup> 「ニーズ」は、「必要、要求、不足」の意の一般語<sup>3)</sup>であり、ここではこれら類

似語を総称して「ニーズ」という語を用いることにする。またその意味するところは、「教育」と「必要性」の造語である「教育必要性」の解釈を援用することにする。「教育必要性」は、「人間は教育を必要とする」という命題であり、「教育は人間が人間に」つまり「生活力ある」「十分に価値ある」「成熟した」あるいは「自律的」と認知された人間に「なるための必要条件である」、という言明あるいはそうした主張の短縮形と解される、とする。また「教育必要性」は、社会的な影響が必要であるという特徴、つまり他者の社会的な態度様式に依存するという特徴を意味している。そしてさらに「人間」という種のすべての成員の特性に本質的または必然的であるような特徴が意味されているか、もしくはある生活期間の一定条件下での一定の人間だけに適する特徴が意味されているかのいずれかである、とされる。<sup>4)</sup>このような「教育必要性」のとらえ方は、本研究の生活経営教育のニーズの考え方のベースになると思われる。一方、ニーズには、主観的に表明された「要求としての学習ニーズ」(人が主観的にその必要を感じているもの)だけでなく、規範的な立場から要請される「必要としての学習ニーズ」(当人が意識するとしないとにかかわらず、ある社会的価値基準や行動理念に基づいて学ぶことが必要と判断されるもの)も含めてとらえていく必要がある。<sup>5)</sup>

また「人間・生活・生命とその世界をとりまく環境」を扱う学の体系性は、「認識学」「実体学」「実践学」の複合的連帯性の確保が要点であり、実践学・現実課題とのフィードバック的なやりとりが大切である<sup>6)</sup>という。さらに、科学を再編し「認識科学」と「設計科学」とするならば、「ありたい姿やあるべき姿を計画・説明・評価」する「設計科学」においてはその前提となる価値選択の理論的・経験的妥当性が問題となる<sup>7)</sup>と指摘されている。教育は「実践学」であり、新しい科学の分類においては「設計科学」に属する。よって、教育的価値と各ニーズとの相互作用およびアセスメント (assessment) の視点(実践学と認識学や実体学とのフィードバック的なやりとり)や教育的価値(価値選択の理論的・経験的妥当性)を組み込んだ教育に関するニーズ把握のための体系を考えなければならない。

これらの基本的な考え方に従って、本研究では教育に関するニーズの体系を図1のように捉えることにした。まず、教育に関わるニーズを「教育的ニーズ」「社会的ニーズ」「学問的ニーズ」とする。教育的ニーズは、教育実践の場におけるニーズで、教育を受ける主体(学習主体)のニーズである「学習ニーズ」と、教育を与える主体のニーズである「教育ニーズ」が考えられる。「社会的ニーズ」は、教育システムに対する社会からの問いかけであり、主に「政治・行政的ニーズ」として捉えることができる。「学問的ニーズ」は、主に生活経営学の学問的視

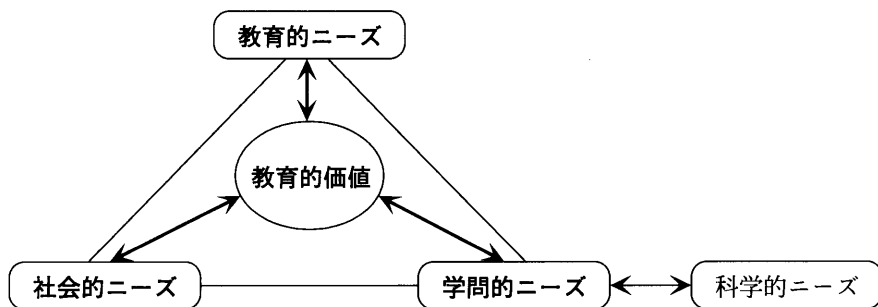


図1 生活経営教育のニーズと教育的価値の捉え方

点から捉えたニーズとする。その「学問的ニーズ」は「科学的ニーズ」との関連を持っている。そして「社会的ニーズ」や「学問的ニーズ」は、教育的価値に照らして「教育的ニーズ」になると考えられる。図1の教育的価値と各ニーズとの双方向の矢印は、両者間の相互作用およびアセスメントを示すものとする。

## 第2節 教育的価値の構造と分類

生活経営教育のニーズの研究に関する最終目的である教育的ニーズを明らかにするためには、次に教育的価値とは何かを検討する必要がある。教育的価値を把握する場合に、その構造という概念は三つに分けて捉えられる。すなわち、まず第一は社会科学的な構造の概念の流れに関連するもので、生産関係や階級社会との関連で議論される場合である。第二は教育的価値の内部構造とでも言うべき、教育的価値そのものの組織を議論する場合に用いられる構造の考え方で、この種の構造論は、教育のダイナミズムにおいては、教育的価値と教育目的との関連の問題として把握される。第三はJ・S・ブルナーが用いた構造と関連し、人間の成長の過程と関連するもので、教育的価値の構造化として動的な過程となり、教育的価値が具体化された教育内容・方法との関連の場を問題とするものである。<sup>8)</sup> 本論文では、教育的価値の構造に関わる第二の視点、すなわち教育的価値と教育目的との関連から、教育的価値を扱うことにする。そして、第一の教育的価値の構造の視点は社会的ニーズの分析、そして第三の教育的価値の構造の視点は教育的ニーズの分析のところで扱う予定である。

そもそも教育は、新しい世代の人間形成に関して行われるもので、そこに見られる教育行為には、何らかの明確な価値志向性があり、また導く方向性が存在すると考えられる。ゆえに、教育主体である人間とその人格の形成の方向性、あるいはさまざまな意味で人間の成長・発達をとりまく環境の形成の方向性を考える必要性がある。<sup>9)</sup> そこで、教育的価値論について主に教育目的の視点からみると、表1に示すように大別して二つの考え方に整理できる。<sup>10)</sup> まず一つは、主に経験主義的な考え方である。その特徴は、教育をもって成長という連続的な過程と考え、それぞれの段階において成長能力を増加させることを目指すもので、現在の人間の姿をもとに発達の価値を実現することが教育の目的となる。この考え方においては、事実としての価値、すなわち現在何が望まれているかという意識された価値が大切と考えられ、普遍的な価値は求めず、もし普遍性を考えるとするとならば動的相対主義的に常に新しい普遍を求めること

表1 教育的価値の分類

経験主義的考え方	系統主義的考え方
現在価値…現在何が望まれているかが大切 事実としての価値 意識された価値 教育の目的…現在の人間の姿を基にして 発達の価値を実現すること 主体と環境との相互作用の視点重視 プラグマティズムの実践的価値論	未来価値…いかにすべきかという望むべき価値が大切 当為価値 普遍的価値、価値のヒエラルキー 教育の目的…学習者の将来の姿、価値的・理想的人間の姿の実現 教育は未来の生活の準備 位階的主体形成論

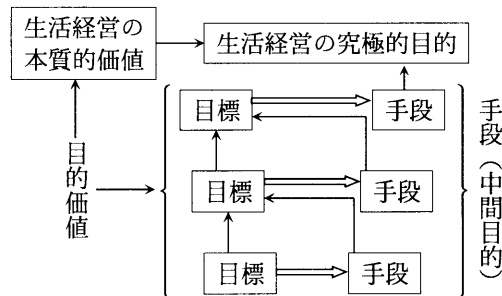
であるという。よって価値のヒエラルキーも存在しないことになる。また、このことから、教育の視点として、環境とのかかわり（主体と環境との相互作用）が大変大事な学習テーマや目標になる。今一つの考え方は、主に系統主義的な考え方で、教育を未来の生活の準備として考え、学習者の将来の姿、価値にそった人間の姿、価値的・理想的人間の姿の実現が教育の目的となる。この考え方においては、当為価値すなわちいかにすべきかという望むべき価値が大切に、普遍的な価値の存在と価値のヒエラルキーが考えられることになる。

### 第3節 生活経営教育における教育的価値の検討

第2節に示した教育的価値の構造の考え方に沿って、以下、具体的に生活経営教育の教育的価値について検討する。大別して二つに分類された教育的価値と生活経営における主体形成論を照らし合わせて見ると、現在価値を中心とした経験主義的な教育的価値にはプラグマティズムの実践的価値論が、未来価値を中心とした系統主義的な教育的価値には位階的主体形成論が相当すると考えられる。

#### 1) プラグマティズムの実践的価値論

まず主に現在価値を中心とした経験主義的な考え方に関わるものとしてあげられるのが、図2に示すようなプラグマティズムの実践的価値論である。今井光映は、家政学・生活経営学の認識の方法として、認識の弁証法による目的価値体系を示しており、その考え方を次のように説明している。<sup>11)</sup>「家政の『政』・生活経営は意思決定の過程であり、価値や目的・目標に関するジレンマの状況の合目的な調整の活動である。この認識は認識の弁証法とかかわる。認識の弁証法においては、認識は低次元のそれから出発し、その限界を自覚しながらも、それを実現しながら、順次、高次元のそれへと試行錯誤的に向上していく。家政・生活経営は生活をめぐる環境の変化に伴う新しい事態、環境、価値体系などと古いそれらとの間の矛盾の情勢を知覚し、新しい事態、環境、価値体系へ適応したり、それらを新しいものに醸成していこうとする恒常的な動機価値・目的価値の実現の過程である」としている。そして、その場合に、



一つの低位目標がその達成とともにより上位の目標の手段と化していくというヒエラルキーにおいて理解される

図2 生活経営過程における認識の弁証法

（今井光映『ドイツ家政学・生活経営学』、名古屋大学出版会、1994、p. 10）

「家政・生活経営の絶対的価値ということは考えないで、それぞれの社会、それぞれの時代、それぞれのグループ、それぞれの個人における価値体系において、それぞれの価値を相対的に主体的に選択決定していくという過程方法をとるのが、アメリカ家政学・生活経営学の認識の方法である。たとえば、『理想の家政像』といったものを、その時代、その所などによって相対的に機能的に求めていき、そのゆきついたところをもって、『理想の家政像』とするという認識の方法である」としている。この考え方は、「絶対ということは考えないで、科学的に経験的な立場をとって向上していくプラグマティズムの理念と方法そのものである」という。このようにプラグマティズムの実践的価値論においては、教育を受ける主体（学習主体）のニーズである「学習ニーズ」を尊重しながら、問題解決学習や体験学習などを通して、環境とのかかわり（主体と環境との相互作用）を学習することによって、個人の成長（主体形成）を目指すことが教育の目的であり方法論となる。

## 2) 位階的主体形成論

今一つの考え方は、主に系統主義的な考え方であり、位階的主体形成論が相当すると考えられる。系統主義的な考え方では、教育の目的を考える場合に、教育理念や教育理想といった教育の普遍的価値を想定し、それを実際の生活に関連づけて、最善の形態に具体化したものが目的や目標であると考え、そこには価値のヒエラルキーが存在するとする。<sup>12)</sup>

例えば、スペンサー（Herbert Spencer、1820－1903）は、実学主義の立場に立って、教育の目的を知識の価値の系列として示している。彼は、有用な知識は、人間生活を構成する主要な活動に役立つものであるべきであるとして、次のような5つの順序に重要であるとしている。すなわち①自己保存に直接的に対応する活動、②生活に必要な品を確保することによって自己保存に間接的に対応する活動、③子どもを育て、しつけることを目的とした活動、④適切な社会的政治的関係を維持するのにともなう活動、⑤生活の余暇をみだし、趣味と感情の充足にむけられるさまざまな活動、の5つの活動をあげ、科学や実利性の教育的価値を評価している。<sup>13)</sup> この5つの知識は、全て「～の活動」として表現されているように、生活の経営（management）と深く関わっているとみることができる。また、今ここに示した例のような価値のヒエラルキーには、教育における価値の優先順位（重要性、頻度性、緊急性）と教育の価値の方向性が示されていると考えられる。近年、これまで功利主義者と言われてきたスペンサーの再評価が行われつつある。そこでは、スペンサーは「生命」「時間」を構成要素として組み込んだ進化論的発想に立った社会システム論を展開し、また、各個人が有機的に関係している「群相」としての社会を主張すると同時に、その中に生きる人間の「個性」を強く主張していたとされ、ゆえに彼は功利主義者ではなかったとされている。<sup>14)</sup> このようなスペンサーの提唱する社会システム論の中に、今日の環境問題と人間の位置付けに関する有益な示唆が見られると考えられ、上述の教育の目的に関しても単なる系統主義的な位階的主体形成論であると言い切れないのかもしれない。

## 3) プラグマティズムの実践的価値論と位階的主体形成論の統合

生活経営教育を歴史的視点からみると、時間、労力、金銭などの資源管理を中心とする生活管理のためのいわゆる実用を主とした実践的教育すなわち経験知的家政教育から、過程（プロセス）、価値、意思決定などを総合したいわゆるシステム論的生活経営論を導入した系統学習的な内容へと変化している。その背景には市民社会における生活者の社会的地位の向上や生活の質の向上、家政学の発展などがある。そして、現在の教育においては、「生きる力」の育成

とかかわって、まさに両者を統合した教育内容や方法論が求められていると考えられる。

また、現在、教育の目標や内容に関して一般的に言われているのが、「基礎・基本」と「社会の変化への対応」である。ここでは、「基礎・基本」はある程度時代を越えて普遍的な教育内容を想定し、「社会の変化への対応」は現代社会の課題への対応であり流動的な教育内容であると考えられる。生活経営教育についてその教育的価値を考える場合、教育の主体性と方向性を考慮し、教育の現在価値と未来価値の両者からのアプローチ、すなわち個人の成長という発達の価値の実現と導く方向性としての相対的に設定される価値の基準を設定することが必要となる。系統主義的な考え方では、普遍的な価値をもって価値のヒエラルキーを考えるが、価値はその基準が動的な世界に照らして経験的に発展すると予測され、民主的な社会においては「社会的一致」が得られた価値を教育の導く方向性とする<sup>15)</sup>ことが考えられることから、ここでは相対的に設定される価値を教育の方向性とした。そこで、生活経営教育の価値については、プラグマティズムの実践的価値論と位階的主体形成論を統合させた教育的価値を志向していく必要がある。

その考え方と合致するものとして大変興味深いのが、長嶋俊介のライフ教育の体系およびマズローの欲求多段階説を基にした主体形成のマネジメント論である。

長嶋は、ライフ教育<sup>16)</sup>に関して、次のように述べている。人間生活の総合性ゆえに求められる総合的自立性という「実践的課題に対応した教育の体系を構想するとしたら、その総合性を満たすのは、外部の体系においてではなく、当事者内部の総合性においてであり、それに働きかける体系性・総合性・連携性が、その対自的（自分とそのまわりの）生活構造を変革しつつ、みずからのライフスタイル（ライフに関わる意識と行動。そして資源の配置の総体）を構築していける人的資源形成に繋がるのである<sup>17)</sup>」としている。それをライフ教育もしくは生活者教育のあるべき統合性として、図3のように示している。この考え方は明らかに経験主義的教育の立場である。

また長嶋は、ライフ教育を「自然環境・社会環境・地域（福祉）形成のマネジメント」と「主体形成のマネジメント」の二つの柱としてとらえているが、その二つの柱のうちの「主体形成のマネジメント」に関しては、図4に示したようなマズローの欲求多段階説を基にした主体形成のマネジメント論を展開している。<sup>18)</sup>この図には、プラグマティズムの実践的価値論と位階的主体形成論の二つの考え方が同時に示されている。図の三角形の部分では、マネジメント能力は高い優先順位のものほど下位に位置づけられている。まず第一に優先すべきは、Health Management（生命生体マネジメント）、次にRisk Management（リスクマネジメント）、さらにRelation-SHIP Management（関係性マネジメント）、HOOD Management（らしさマネジメント）、Value Management（価値マネジメント）としている。このマネジメント能力の位階的構造は、教育的価値の視点からは価値の優先順位と方向性を示していると見ることができる。また図の左の「主体形成」と書かれた部分は、Human Ecologyの中にBasic Human Needsを位置付けることによって人間の基本的欲求と環境との調整を図りながら、自立・自律した生活主体や自力<sup>19)</sup>を持った生活主体の形成を目指すことを示している。以上のように、この主体形成のマネジメント論においては、生活主体としての人間の成長を教育の目的として捉えると同時に、マネジメント能力の位階的構造に見られるような教育の方向性が示されており、よってプラグマティズムの実践的価値論と位階的主体形成論を統合させた教育的価値の設定の可能性が示唆されていると考えられる。

生活経営教育における教育的価値論

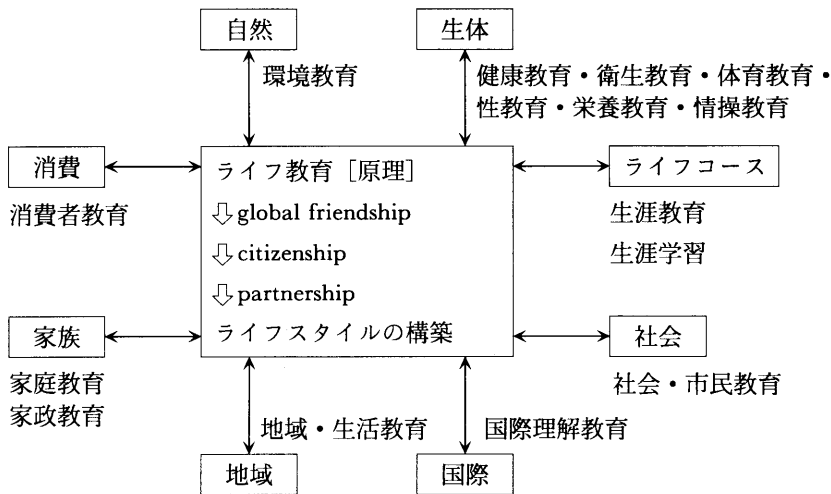


図3 ライフ教育のあるべき統合性と総合性

(長嶋俊介『生活と環境の人間学』、昭和堂、2000、p. 6)

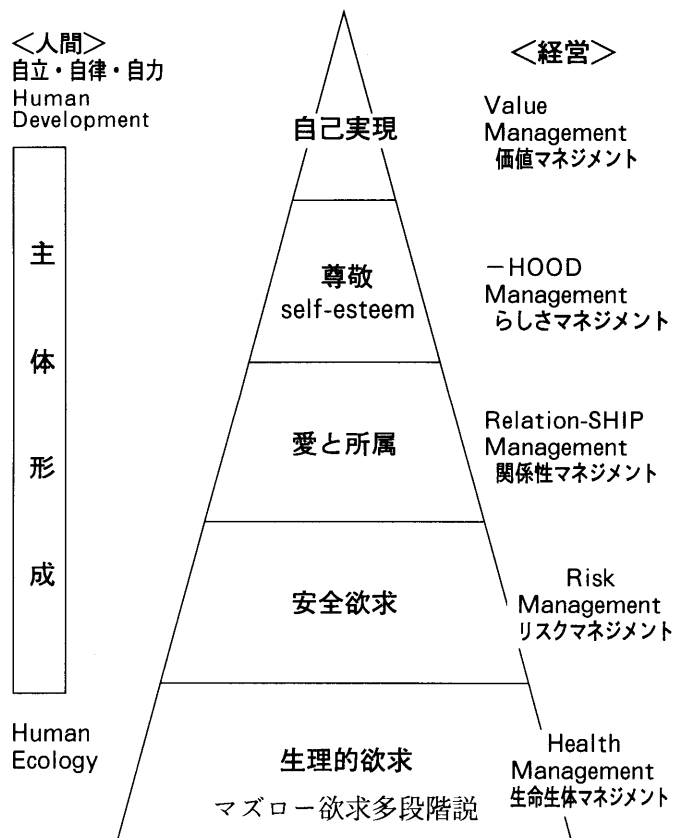


図4 位階的主体形成と自立マネジメント (長嶋)

## 結 語

本研究は、生活経営教育のニーズについて明らかにするために、まずそのステップの一つとして生活経営教育の教育的価値を検討することを目的としたものである。本研究で明らかにした点は以下の通りである。

- 1) 教育に関するニーズを、「教育的ニーズ」「社会的ニーズ」「学問的ニーズ」とし、これらは教育的価値とアセスメントのプロセスを経ることによって相互作用を持つものであるとして、それらを体系的に示した。
- 2) 教育的価値を教育目的の視点から取り上げ、大別して二つに分類された教育的価値と生活経営における主体形成論を照らし合わせて、現在価値を中心とした経験主義的な教育的価値にはプラグマティズムの実践的価値論が、未来価値を中心とした系統主義的な教育的価値には位階的主体形成論が相当するとした。
- 3) プラグマティズムの実践的価値論と位階的主体形成論の両者を統合させた教育的価値の設定の必要性を指摘し、それに該当する主体形成のマネジメント論を検討した。

今後は、教育的価値に照らして社会的ニーズおよび学問的ニーズを検討しながら、生活経営教育の教育的ニーズとは何かを明らかにしていく予定である。本研究を進めるにあたりご指導をしていただきました奈良女子大学の長嶋俊介教授に心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 吉本敏子「生活経営教育の概念枠組」、『三重大教育学部研究紀要』第52巻（教育科学）2001、119－131頁
- 2) 日本生涯教育学会編『生涯学習事典』、東京書籍、1990、58－59頁  
小笠原道雄・林忠幸・高橋洸治・田代尚弘訳『教育科学の基礎概念』、黎明書房、1980、171－177頁
- 3) 『ランダムハウス英和大辞典（第2版）』小学館、1994、1807頁、「need」
- 4) 小笠原道雄・林忠幸・高橋洸治・田代尚弘訳『教育科学の基礎概念』、黎明書房、1980、177－184頁
- 5) 日本生涯教育学会編『生涯学習事典』、東京書籍、1990、58頁
- 6) 長嶋俊介「学の総合化と実践にむけた融合化－生活環境学知とその体系－」、長嶋俊介編著『生活と環境の人間学』、昭和堂、2000、7－8頁
- 7) 未定稿（中央大学 吉田民人）
- 8) 田浦武雄著『教育的価値論』、福村出版、1967、183－184頁
- 9) 今村光章「教育学からのアプローチ－環境教育（学）を軸として－」、長嶋俊介編著『生活と環境の人間学』、昭和堂、2000、206－207頁
- 10) 田浦武雄著『教育的価値論』、福村出版、1967、194－211頁  
上田薫著『人間形成の論理』、黎明書房、1967、21－38頁  
大浦猛編著『教育学研究全集第1巻 人間像の研究』、第一法規、1976、1－25頁
- 11) 今井光映著『ドイツ家政学・生活経営学』、名古屋大学出版会、1994、9－13頁
- 12) 田浦武雄著『教育的価値論』、福村出版、1967、194頁
- 13) スペンサー著、三笠乙彦訳『知育・徳育・体育論』、明治図書、1969、20頁
- 14) 挾本佳代『社会システム論と自然 スペンサー社会学の現代性』、法政大学出版局、2000
- 15) 田浦武雄著『教育的価値論』、福村出版、1967、210－211頁
- 16) ライフ教育は、筆者が意図する生活経営教育と近似の概念である。
- 17) 長嶋俊介「学の総合化と実践にむけた融合化－生活環境学知とその体系－」、長嶋俊介編著『生活

と環境の人間学』、昭和堂、2000、4－5 頁

18) 未定稿（奈良女子大学 長嶋俊介）

19) 自力（resistance）は批判的思考（critical thinking）に近い概念である。